

回 会 報

162号

新日本美術協会

事務局
横浜市港南区港南台
1-39-5
鈴木忠義方
Tel.045-832-0504

編集委員
小高峯夫
富岡ネム
大石亨
四方公子
早田美智子

原稿常時募集
次号平成30年8月予定

絵画小品部門の新設について

事務局長鈴木忠義

新緑の候会員各位におかれましては、ますますご清祥のことと存じ上げます。当会の諸事業はお陰様で順調に実施できていると、ひとえに会員各位のご協力のおかげと感謝申し上げます。

さて、絵画の部に「小品部門（10号〜25サイズ）」を設け一般公募を行ったのは3年前の第39回展であります。以後40回、41回展と続けてきましたが今年の第42回展の公募開始にあたり内容、制度を見直し一新して新日美展部門構成の一つの柱として育てるべく立ち上げたものであります。

各位には、下記に述べる小品部門の背景などをご理解いただき念頭に置きながら広報活動に努めていただければと願うものであります。

・「小品部門設定の背景」

いま、私達周囲の社会では、文化構造が多様化し大きく変わりつつあります。当然、各公募団体にもその影響は及んでおり、活動の方針など従来とは違う方向

に進んでいます。

最近の公募展を見ると、従来の発表型の展覧会から趣向を凝らしたイベントなどを交えた鑑賞者と作家が一体となった企画設定の展覧会が多く見受けられるようになりました。

一方、もう一つの社会現象として少子高齢化の波が公募団体にも押し寄せていることです。在籍会員の高齢化とともに一般応募者の減少という、公募展の根拠と将来の展望を揺るがしかねない問題が顕在化する傾向にあります。

以上大まかに問題点を整理しましたが今回このようなことから「小品部門」を一新して「大作部門」と合わせ作品の大きさに応じた募集範囲を広げ時代の趨勢に適応できるように策を講ずるものであります。

会則第3条に定める当会の「目的」には「新人の発掘、育成、美術文化の向上発展に寄与する…」とあります。また、社会における地方、地域では行政が中心となつて豊かで活力ある地域基盤を創造

するための文化活動を積極的に推進し、〇〇教室」等で大勢の方が創造活動に参加しています。

「小品部門」がこれらの方々の発表の受け皿となれば、当会の目的の趣旨にも合致するものであり「小品部門」の価値、重要さもここにあるのではと考えるものであります。

・「小品部門の実施要領」

前置きが長くなりましたが、実施概要は次の通りです。

◎（新設）小品部門（10号〜25号）、（既定：大作部門：30号〜150号）

◎ 審査は対策部門とは別に行い、賞は小品部門大賞、奨励賞、努力賞他を検討しております。

◎（※会員と一般応募作品の審査方法や賞については検討中）

◎ 応募の際の難点としては、搬送費の高額問題であります。小品部門「サイズであれば宅配便の利用が可能で大作に比べ廉価となります。なお、搬入手続き、梱包など経費については、当会指定業者と折衝中でありあります。以上

委員コラム

感動と表現 松本正

森の中に一軒の作業小屋か物置が描かれた絵がある。一見小屋があるだけの絵ですが夕ツチは荒々しく森は沈んだ色合いで小屋の屋根は銀色に鈍く輝く、そこ流れる空気や静けさ匂いや時の流れまでも感じる。描かれているものだけでなく作家の思いが滲み出るよう表現されませんか？ごく引き込まれる絵を見たことがある。

ある大学の先生が言っていることを思いだす。絵画は対象を書き写しただけでは芸術のレベル迄高めることはできない。例えば素敵な風景に出会ったときに感動する、この感動した感覚が大事、普通に生活していると、素晴らしいものに出会っても「当たり前」という感覚が働いてしまい感動するという域にまで達しない。

自分にとつて素晴らしいと感じる雰囲気を感じたとき、素直にいいなと思える感覚を磨くことが大切だ。

雰囲気とは有る場所や物、人物を取り巻いて感じられる光や匂い、気配、気分、空気などを総体として捉えて指したものだ。普通に対象を描くことと雰囲気を描く事の違ひは、写真の様にそのまま写し取って描くのと、感動した雰囲気をどう感じたかを描くという事になるので、自己表現力の必要な所となる。

自分らしい表現という点では、自由度が高くなる雰囲気を描くというのは抽象的だけれど、抽象的なものを捉えて自分らしく表現するのは個人的な感覚なので、感覚は人によってみんな違う。だからこそそこに個性が生まれ驚きや感動を与える。

話は元に戻りますが、たとえごく平凡な森の中の一軒家であっても何に感動して何を表現したいのか自分らしい絵に表現できれば、見る人に感動を与えられるのだと思うのです。